

新しい色のトルコギキョウの新品種「秋試交1号」

間藤正美・佐藤孝夫

1. ねらい

秋田県では昭和60年代からトルコギキョウの生産が本格化し、夏季冷涼な気候を利用した夏秋期良品出荷を目指した栽培体系が盛んに行われている。トルコギキョウの生産額は急速に伸び、キク、ユリについて県第3番目の作目となり、全花き生産額の5%を占めている。しかし、近年トルコギキョウの単価は、他県との競合や生産量の増加により低迷しており、そのため市場性の高い秋田県オリジナル品種の育成を行なっている。

トルコギキョウは自殖弱勢を示し、固定種よりF1種の方が生育旺盛である。生産者は主にF1種子を用い、F1種にあった栽培をしている。そこでトルコギキョウを雑種強勢法で育種している。

ここでは目標花色を市販品種にない黄緑地にピンクの覆輪花色とし、F1種の育成を行った。

2. 育成方法

従来の雑種強勢育種法は、後代を見なければ目的の花色が得られたかが分からない。そこで、花色素分析を活用し、F1で目標花色になる花色素を含む両親を選抜し、その両親の組み合わせで、目標花色のF1を育成した(図1)。

3. 育成経過

母本は平成9年から自殖を繰り返した黄緑花色の固定系統、父本は平成11年に自殖した白地にピンクの覆輪花色の固定系統を用いた。平成12年に交雑し、F1種子を得た(図2)。育成した黄緑地にピンクの覆輪花色は市販品種に無く新規性があるため、オリジナル品種として登録申請した。

4. 特性概要

花色は黄緑地にピンクの覆輪である。花形は鐘状で中輪、花柄の長さはやや短めである(表1)。この品種の花色は太陽光下よりも、室内光でより一層黄緑地が発揮される。

草丈は90cm以上と高く、主茎節数は多く、草姿は頂点咲きである。茎の剛直性は強である。開花の早晩は、中性である(表2)。

無シェード栽培は、12月上旬播種から4月中旬播種の作型まで良品生産が可能である(図3)。5月播種のシェード栽培も可能である。

5. まとめ

花色素分析の活用はF1で目的の花色を得るために、後代を見ずに両親の組み合わせを決定でき、雑種強勢育種に効率的である。この手法は、トルコギキョウの他の花色をF1で育成するときにも活用できる。

今後、さらに八重咲き品種を含め、県オリジナル品種を育成すると共に、県の気象立地を生かせる品種育成を目指す。

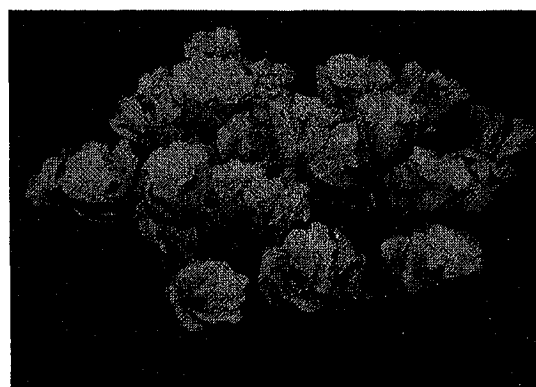


図1 「秋試交1号」

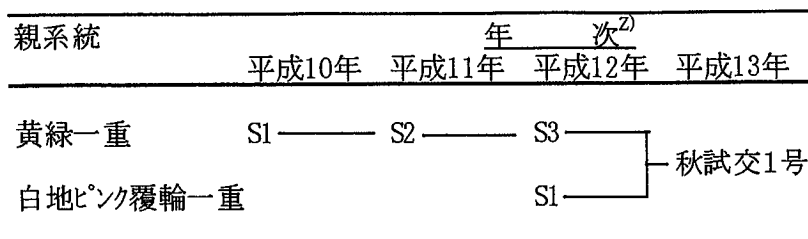


図2 「秋試交1号」育成経過

²⁾ S:自殖、数字は世代

表1 花の特性²⁾ (平成12年12月8日播種)

系統、品種名 ¹⁾	花形	花冠内面 底部の色 ³⁾	花冠内面 先端の色 ³⁾	花冠内面 中間部の色 ³⁾	花の 大きさ	花柄の太さ (mm)	花柄の長さ (mm)
秋試交1号	鐘状	黄緑、3512	鮮紫ピンク、9504	淡黄緑、3502	中輪	2.2	72.1
あずまの粧	杯状	黄緑、3512	隠紫ピンク、9712	黄白、2501	大輪	2.1	137.7
メロウパープルライム	鐘状	黄緑、3512	鮮紫、8607	淡黄緑、3502	中輪	2.2	131.9

²⁾ 第2花の特性

¹⁾ あずまの粧、メロウパープルライムは市販品種

³⁾ JHSカラーチャートによる

表2 生育特性 (平成12年12月8日播種)

系統、品種名	草丈 (cm)	茎の 剛直性	茎色	茎径 (mm)	主茎節数 (節)	分枝数 (本)	葉長 (mm)	葉幅 (mm)	葉色	草型	開花日 ²⁾ (月日)
秋試交1号	97.5	強	緑	6.5	14.6	4.9	101.3	61.7	濃緑	頂天咲き	7月21日
あずまの粧	78.8	強	緑	6.4	11.6	4.9	94.6	67.2	濃緑	スプレー咲き	7月10日
メロウパープルライム	85.9	強	緑	6.7	11.5	4.8	90.1	53.2	濃緑	スプレー咲き	7月10日

²⁾ 第2花の開花日

表3 「秋試交1号」の作型別生育特性 (平成13年播種)

播種日 (月日)	草丈 (cm)	主茎節数 (本)	分枝数 (本)	花蕾数 (個)	茎径 (mm)	切り花盛期 ²⁾ (月日)	ロゼット化率 (%)
2月15日	91.7	16.7	3.3	15.3	5.0	8月18日	0
4月15日	84.8	11.4	2.4	15.0	5.2	9月4日	0
5月15日	61.0	9.0	2.2	8.0	4.3	9月23日	0

²⁾ 50%切り花時

表4 「秋試交1号」のシェード栽培生育特性 (平成14年5月8日播種)

草丈 (cm)	節数 (節)	分枝数 (本)	花蕾数 (個)	切り花盛期 (月日)
79.1	11	3.5	18.5	10月23日